

松下国際財団 研究助成

研究報告

【氏名】香坂 直樹

【所属】（助成決定時） 東京大学教養学部 非常勤講師

【研究題目】「スロヴァキア」の地位に関する 1930 年代の諸構想
— 「国民の領域」の具体化過程—

【研究の目的】

本研究は、戦間期にスロヴァキア地域が急速に地域単位として地位を高めた過程に注目し、その変遷とスロヴァキア人政治家が提示した各種の地域構想及び両者の関係を考察した。具体的構想の分析を通じて、「自治」や「中央集権」という包括的概念に留まらず、戦間期のスロヴァキア人知識人が抱いたチェコスロヴァキア国家内での「スロヴァキア」という領域に関するより具体的な地域認識とその論理を描写できる。そして、スロヴァキアという具体例に基づき「国民の領域」が具体的に想像される過程を全般的に提示することを目的とした。また、従来の戦間期スロヴァキア政治の構図、すなわち、一方の極にスロヴァキア・ナショナリストの自治派の政党があり、他方にチェコスロヴァキア主義の全国政党に所属したスロヴァキア人政治家、いわゆる中央集権派がスロヴァキアに対する特殊な地位の付与を拒否するという二者対立の構図を相対化することも目標としている。

【研究の内容・方法】

以上の関心に基づき、本研究では戦間期のスロヴァキアで活動した諸政党や諸勢力が提示したスロヴァキアに関する具体的構想や論考を論点別に比較する手法を採用した。史料としては戦間期のスロヴァキアで発行された新聞や雑誌を用い、ある構想が引き起こした議論を再構成しつつ、各勢力の論理の考察を試みた。

具体的論点としては、スロヴァキアの中心都市に関する議論を扱った。これは、一般的に各国の首都は国民が自国の領域を想像する際の重要な要素であることに加え、現在のスロヴァキア共和国の首都であるブラチスラヴァが、戦間期のスロヴァキア全域の地位向上の過程と歩調を合わせて、同時期に地域の中核としての地位を獲得したという特異な過程を考慮したからである。また中心都市／首都の問題に注目することで、スロヴァキアの領域を扱う構想に関して自治対中央集権という対立軸には回収されない議論を描きだせると予期したためである。

具体的にはルター派の宗教家でもあるスロヴァキア人知識人のフェドル・ルッペルトが戦間期に提示した議論を巡る各派の対応に注目した。ルッペルトはブラチスラヴァではなくスロヴァキア中部のマルティンがスロヴァキアの中心都市となるべきと論じ、ブラチスラヴァを中心として受容したスロヴァキア人政治家との相違を生みだした。ルッペルトはブラチスラヴァがスロヴァキアの領域とスロヴァキア民族の居住地の辺境に位置した一方で、マルティンが両方の意味でスロヴァキアの中心に位置するという地理的根拠と、マルティンの新たな都市整備を通じて貧困地域である中部スロヴァキアで新たなスロヴァキア人中産層を育成でき、なおかつ戦間期に諸政党の成立という形で現れたスロヴァキア人の政治主張の分化を防ぎ、かつて 19 世紀後半に存在したスロヴァキア人勢力の結集を再現できることをマルティン新都建設の利点として掲げた。しかし、ドナウに面したブラチスラヴァの経済的利点を重視するスロヴァキア人勢力の主流派の支持を獲得できなかった。

【結論・考察】

両者の対立はスロヴァキア知識人の間で「スロヴァキア」の領域に関して複数の認識が存在したことを明らかにする。ルッペルトはスロヴァキア人が小民族であり、その影響力は限られているとみなした。それゆえ、民族文化を保守するため中部のマルティンを文化発信地へと整備する必要を論じ、多文化的な都市だったブラチスラヴァを自民族の文化へと同化する可能性に懐疑を抱く。国境線の内側に民族文化の防衛線を設定したのである。他方、ブラチスラヴァを中心とみなした主流派は同市の経済的意味を重視したのみならず、同市の（チェコ）スロヴァキア化の可能性を信じた。このように中心都市を巡る議論と地域認識の相違の背景には、スロヴァキア人の政治的・文化的影響力に関する認識の相違が存在した。また対立の構図は自治派對中央集権派ではなく、戦間期スロヴァキア人政治家の政治路線の多様化に対する是非に基づいた。この点を明確にしたことが本研究の成果であり、今後はスロヴァキアに居住した少数民族や各地方・都市の視点を組み込みつつスロヴァキアの領域認識に関する議論を包括的に把握し、さらには戦間期中欧に存在したその他の地域再編構想との比較を進めるべきだと結論付けられる。